

# ニュースの本棚

本社編集委員

上丸 洋一



東京災害支援ネット編著  
「3・11福島から東京へ」  
(山吹書店発行、JRC発売  
1785円)



中原聖乃著「放射能難民から生活圏再生へ マーシャルからフクシマへの伝言」(法律文化社・2520円)



小野智美編「女川一中生の句 あの日から」(羽鳥書店  
945円)

## ■〈3・11〉から2年

### 目を向けるべき現実とは

「今、原発に伴うリスクについて、情緒的な議論がなされていますが、あらゆる文明の利器にはリスクが伴います」

「日本は(原発を)輸出することによって、技術が練磨されると思っています」

雑誌「原子力文化」(日本原子力文化振興財団)の今年1月号に掲載された対談の一節だ。

〈3・11〉から2年。まるで何事もなかったかのように原発を語る人がいる。現実的には原発を維持するしかない、現実的であれ!

しかし、多くの人々が放射能に追われて避難している現実、真夏も真冬も電気が足りた現実、いつまた大地震が起きてもおかしくないのが日本列島だと

いう現実……には、なぜかあまり目を向けない。震災と原発事故の現実を語る本は、読み切れぬほど出ているというのに。

被災地から東京へ避難してきた人々たちを支援する弁護士らの団体「東京災害支援ネット」(略称とすねっと)が発足したのは、震災発生8日後の3月19日。『3・11福島から東京へ』は、その貴重な活動記録だ。

ボランティアを避難所に入れまいとする東京都。原発近くの町村から避難してきた人に、住民票がないとの理由で、けんもほろろの対応をする東京電力。

「何の落ち度もなく何の利益も得ていない」人々が負わされる「避難」という苦役の現実を明らかにする。避難は人権である。その視点が社会に欠落していることを本書は教えている。

海に向こうにも 人々が放射能に苦しむ現実。海に向こうにもある。米国は中部太平洋マーシャル諸島で、1946年から58年の間に、実に67回もの核実験を繰り返した。

第五福竜丸などが被曝した54年のビキニ環礁での水爆実験では、近くのロンゲラップ環礁の住民が被曝し、別の島に移された。米国の安全宣言を受けて57年に帰島したもの、健康被害が多発し、85年に再移住した。

『放射能難民から生活圏再生へ』の著者中原聖乃は15年来、島の人々と生活を共にしながら調査してきた文化人類学者だ。

島の住民が、超大国米国と渡り合って、再生に向け、どう生き抜いてきたか。私たちに多くの示唆を与える。中原と竹峰誠一郎の「核時代のマーシャル諸島」(凱風社・2520円)、島田興生・渡辺幸重「ふるさとポイズンの島」(旬報社・1575円)も理解を助ける。

### 星空を忘れない

太平洋に面する宮城県女川町(おんながわ)では、町民の1割近い827人が津波の犠牲になった。高台にある女川第一中学の生徒約200人は、2011年5月と11月に俳句の授業を受けた。季節にはこだわらず、五・七・五と指を折った。

句を読ませてもらった朝日新聞記者小野智美は、生徒のもとを訪ね歩き、その話に耳を傾けた。「女川一中生の句 あの日から」は、同紙宮城版の連載がもとになっている。

町は津波で壊滅した。生徒の一人は、こう詠んだ。

〈見たことない 女川町を受けとめる〉 渡邊佳菜絵  
母を亡くした生徒は――。

〈逢いたくて でも会えなくて 逢いたくて〉 佐藤あかり

母と祖父母の4人家族だった少年は、あの日深夜、町の体育館の外に出て空を見上げた。

1週間後に母が、5カ月後に祖母が見つかった。

〈忘れない あの日夜の星空を〉 佐藤亮太

過酷な現実と向きあい、「必死になってたどり着いた言葉」

(佐藤敏郎教諭)が胸を打つ。

◇じょうまる・よういち 55  
年生まれ。『原発とメディア』



福島第一原発事故を受け、福島県などから避難してきた人々＝2011年3月20日、さいたまスーパーアリーナ